

診察の際は症状の確認と合わせて、どんな環境で生活しているかを確認することも大切



「新型コロナウイルスの影響が長引く中、感染を心配するあまり、本来通院治療が必要な人が通院していないという事例が多くあります。もちろん感染対策は重要ですが、通院や検診により、早期発見できる病気が発見できなくなることはコロナ禍における大きな課題だと感じています」と話すのは岩国市医師会長として医療現場を支える



日々地道に

誠心誠意を尽くしたい

小林元壯さんです。

小林さんは幼い頃、身体障害者でありながら鍼灸師として深夜まで働いていた父の姿を見るうち医師になりたいと自然に思うようになったと言います。

岡山大学医学部を卒業後、国立岩国病院の外科医として勤務することになった小林さん。国立岩国病院では通常の診察や手術の他、海外での難民医療支援にも参加するなど医療技術を磨きました。

日々、病気に向き合う小林さんは、がん治療にも精力的に取り組みました。が、んは当時は治らないと言われていましたが、何とかしたいとの思いで治療を続けていたと言います。こうした経験を通して小林さんは病気の「早期発見」の大切さを痛感し、適切な通院と

Vol.152

小林 ^{げんそう}元壯さん
(麻里町在住)

昭和27年8月広島県庄原市生まれ。外科医として国立岩国病院で勤務後、平成11年に小林クリニックを開設。平成22年からは岩国市医師会の会長を務めている。

検診が命を守ることを実感します。

小林さんは、もう少し一人一人に寄り添って治療していきたいの思から、平成11年に小林クリニックを開業します。そして開業後は地域や企業などでの検診や啓発活動にも積極的に関わってきました。

新型コロナウイルス感染症の発生後は、岩国市医師会長として、行政と連携してワクチン接種の日程や運営方法について協議するなど、これまで以上に多忙な日々を過ごしています。

「新型コロナウイルス感染症対策は、まだまだ先の見えない状況が続いています。医療現場も大きな影響を受けていて、多くの課題はありますが、地道に課題を乗り越え、皆さんが安心して治療が受けられるよう頑張りたい」と力強く話してくれました。



難民医療支援では、深夜の当直で緊急の帝王切開を執刀し母子を助けることができた



国立岩国病院で肺がんの手術を行う小林さん（右から2番目）

